【公表の参考様式（管理機関用）】　　別添２

令和５年８月３日

令和４年度　特別の教育課程の実施状況等について

滋賀県		
学　校　名	管理機関名	設置者の別
米原市立山東小学校	米原市教育委員会	公

１．学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学　校　名	特別の教育課程の編成の方針等の公表 URL
米原市立山東小学校	https://santo-e-maibara.edumap.jp/page_20220424031501

※必要に応じて行を追加すること。

２．学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学　校　名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
米原市立山東小学校	https://santo-e-maibara.edumap.jp/page_20200616222945	https://santo-e-maibara.edumap.jp/page_20200616222945

※必要に応じて行を追加すること。

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

（・計画通り実施できている
・一部、計画通り実施できていない
・ほとんど計画通り実施できていない）

（２）実施状況に関する特記事項

※（１）で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

（・実施している
・実施していない）

＜特記事項＞

年間数回ある地域公開学習参観日において、保護者および地域の方々に英語の授業を公開し、理解を図っている。また、令和４年度は、親子英語授業を設定し、家庭でも行える英語の学びを保護者に体感していただくことができた。

３．　実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校は自然豊かな環境に恵まれ、近くには田園風景が広がる小規模校である。代々その土地に住み続ける人が多く、人の流出が少ない。そのような土地柄において、外国の方と交流する機会はほとんどない。また、本校の児童は、明るく素直な子が多い。全ての学年が単学級のため、お互いをよく知り、思いを通じ合わせている。しかし、その反面、人間関係が固定化されやすく、馴れ合いの中では自分の思いを進んで話す力や豊かな表現力が育ちにくい。また、指示待ちの傾向も見られ、受け身で消極的なところもあり、積極的に人と関わることを苦手と感じている児童も少なくない。そこで、英語科の学習を通して、子どもたちが英語をツールとして、積極的に人と関わる力を育成することが大切であると考え取組を進めてきた。

６年生では、英語科で学んだことを生かして、同じ中学校区の６年生とビデオ交流を行った。次年度に同じ中学校に行く仲間として、英語で自己紹介をし、コミュニケーションが図れたことは、児童にとっても喜びであった。また、本校にはＳＥＡ（スポーツ国際交流員）が週に一度訪問し、おもに体育科の学習を担任と共に行っている。英語以外の授業でも、英語を身近に感じることができ、児童が積極的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする様子が見られた。

本校では、年間数回の学習参観日を設けている。そこで英語の学習も積極的に公開し、児童が英語に慣れ親しむ姿や英語で他者とコミュニケーションを図る様子などを保護者や地域の方々に参観いただいている。また、令和４年度は、学校だけでなく、家庭でも英語の学びを意識できるよう、親子英語授業を行い、保護者にも家庭でできる英語の学びを体感していただいた。

児童対象の学校評価において、令和３年度までは、「英語の勉強は楽しい」の設問を設定しており、８割以上の子どもが肯定的な回答をしていた。令和４年度については、「英語を使って友達とのやりとりをすることは楽しい」という文言に変え、これについても８割以上の子どもが肯定的な評価をしており、英語科の積み重ねの結果、ねらっていたコミュニケーションツールとして活用の成果が現れたと考える。引き続き授業改善に取り組み、さらに児童が主体的に学んでいくよう努めていきたい。

また、教師の英語の指導力の向上が課題としてあげられる。４５分の授業では、英語指導助手と英語パイオニアにおける加配教員の授業が中心となり、モジュール学習（１５分）で行う時は担任に任される部分が大きい。モジュール学習も計画的に行えるように、本校独自のカリキュラムを作成したが、教師一人一人の英語指導力には差

がある。今後も、OJT 研修などを活用しながら指導力の向上に努めていく。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

令和４年度全国学力学習状況調査質問紙調査から、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか」の項目では、解答した全児童が肯定的な評価をしている。しかし、「自分にはよいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」「難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦していますか」の項目における肯定的評価は全国と比べて同等と見られるが、「どちらかと言えば、当てはまる」の回答が多く、今ひとつ自信がもてていない現れであると捉え、自尊感情や自己肯定感の向上の必要性を感じた結果となった。英語科の取組を通して、コミュニケーション能力をさらに高め、自己開示を通して人とつながり、違いを認め合うことで自身の良さにも気付きがもて、自尊感情や自己肯定感が高まると考える。また、英語をツールとして、様々な国の人とつながることが、広い視野をもってこれからのグローバル社会に生きる力先の将来の展望をもつことにつながるよう取組を進めていく。

４．課題の改善のための取組の方向性

課題の一つ目に、英語科の指導方法や指導技術の向上および教師の英語力の向上があげられる。指導方法や技術について、校内研修会（OJT 研修）の開催または外部研修会へ参加していく体制づくりが必要と思われる。

二つ目に、教材の開発や準備のための時間の確保、英語指導助手との打ち合わせ時間の確保などがあげられる。英語科が始まり、随分教材開発は進んできた。しかし、一点目の課題の点からも、今まで積み上げてきたものが全職員の共有財産となっているかいうと、そこに弱みを感じる。したがって、引き続きカリキュラムマネジメントの視点から課題解決を行う必要があると思われる。

三つ目に、令和３年はコロナ禍での取組であったため、本来ねらいとしていた英語をツールとしたコミュニケーションやペア・グループ活動を仕組むことに難しさがあった。そのような中でも、タブレット端末を活用しての発表物の作成の技術に向上が見られたため、今後、感染症の収束とともに、向上した技術を活用して、さらなるコミュニケーションの充実を図っていく。